兵庫教育大学　研究紀要　第45巻　2014年９月　pp. 155－162

大学生のボランティア活動を文化研究の視点から考える
－G・C・スピヴァクの理論と実践を手掛かりとして－

Speculating about Student Volunteering from the Perspective of Cultural Studies: An Approach Based on G. C. Spivak's Theory and Practice

横　山　　香*
YOKOYAMA Kaori

2013年４月、兵庫教育大学教職キャリア開発センターに、本学学生のボランティア活動を支援する部門として新たに「ボランティア活動支援部門」が設置され、大学教育とボランティアについての研究が行われることとなった。その方法として、一方ではボランティア活動の教育的効果を実証的に検証する調査研究が考えられる。しかし他方で、ボランティア活動を文化的実践として見ることで、文化研究の視点から捉えるアプローチも可能ではないかと考えた。本稿ではその手掛かりとして、G・C・スピヴァクの「サバルタンは語ることができるか？」という問いを用い、彼女の理論と実践を追いながら、サバルタンとボランティアを受ける側に共通する「語れない他者」という問題性を取り上げて考察した。その際、スピヴァクの「知識を捨て去ること（unlearning）」という概念を援用し、またスピヴァク自身の実践への関わりを参照しながら、ボランティアをする側がされる側の人々に対して、代弁することでも、語らせることでもない、声を聴き、声を声とするための回路を開くという方法の可能性を示唆した。大学生にとって、「語れない他者」と関わることから生じる自己反省は、ともすると彼女ら／彼らに困難を引き起こしてしまうかもしれない。しかし実践と内省という循環のなかで知や想像力を涵養することは、ボランティア活動の持つ教育的側面の一つであり、高等教育機関としての大学が学生に提供できる重要な学びの一形態でもあると考える。

キーワード：高等教育、ボランティア、文化研究、他者、G・C・スピヴァク
Key words：higher education, volunteer, cultural studies, others, G. C. Spivak

１．問題の所在

2013年４月、兵庫教育大学教職キャリア開発センター（通称キャリアセンター）は、これまで別々の場所で行われてきたさまざまな学生のボランティア活動、すなわち不登校児童生徒支援「NANA っくす」[1]、各市町教育委員会主催のスクールサポート（学校ボランティア）、生涯学習、地域連携事業等を取りまとめ、包括的に支援する部門として、新たに「ボランティア活動支援部門」を設置し、「就職支援部門」「キャリアデザイン支援部門」「調査研究部門」と合わせて合計４部門からなる組織となった。筆者は教職キャリア開発センターの専任教員として、ボランティア活動支援部門における大学教育とボランティアに関する調査研究に携わることになった。個人的にこれまで組織的なボランティア活動に関わってきたわけでも、ボランティア研究を専門に行ってきたわけでもなかったため、ボランティア関連の文献を読みながら、ボランティア研究のためにどのようなアプローチが可能かを考えてみた。

一つのアプローチとして、ボランティア活動に参加する学生の成長を見て、ボランティアの「教育的効果」を測る研究が考えられる。大学生がボランティアを体験する必要性はますます重要視されるようになってきており[2]、ボランティアのための支援機関を設置したり、ボランティア活動やサービス・ラーニング[3]を単位化したりする大学も増加している。その際重視されているのが、学生の経験の広がり、知識や意欲の増加、コミュニケーション能力・リーダーシップ・礼儀作法・タイムマネジメント能力等々、社会人としての基本的能力、あるいは公共心・道徳心などが、ボランティア活動を通じていかに変容し、人間として成長したかを測ることである。ボランティアやサービス・ラーニングのための支援機関が大学の一組織であり、ボランティア活動を重要な教育活動としている以上、大学のアカウンタビリティとして、その教育的効果を検証していくことは当然のことであろう。

しかし一方で、学生のボランティア体験をすべて数値で測れるような「効果」「実績」といった枠に入れるのではない形で、ボランティアを学生の人間的な成長の契機として捉えるようなアプローチも可能ではないだろうか。たとえばボランティアにつねにつきまとう、ボラン

＊兵庫教育大学教職キャリア開発センター
平成26年５月12日受理

ティアをする側とされる側の力関係、代表／表象の問題等は、人文学的な文化研究[4]における問題性と重なる部分がある。このように文化研究の視点からボランティアを考えようと思ったのは、筆者自身がボランティア活動に関わる際に、ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク[5]の「サバルタンは語ることができるか？（Can the subaltern speak?）」という問いをつねに念頭に置いてきたからでもある。

1996年７月、「言語文化学の可能性―現在と未来―Linguisticulture-Where Do We Go From Here ?」と題する国際シンポジウムが開催された[6]。壇上のシンポジストたちが一通り言語文化学の展望についてコメントをした後、シンポジストの一人であったスピヴァクが、あらかじめ座席に配布されていた一枚の資料について話し出した。その資料はバングラデシュの山地民族女性が誘拐された事件についてのもので、彼女は日本の学者が連帯のことばを送ってくれるなら連絡してほしい、というアナウンスをしたのであった[7]。筆者は当時大学院生であったが、いわゆる「第三世界」の女性たちに降りかかっている問題に「介入（intervention）」する彼女の姿勢と力強いことばに圧倒された。自分の研究対象とする世界以外について何も知らなかった、何ができるかも分かっていなかった大学院生にとって、あのスピヴァクのイメージはあまりにも鮮烈で、その後も消えずに残っている。1998年に日本語に翻訳された『サバルタンは語ることができるか』を読み、スピヴァクのあのアナウンスと、理論で固められたこの著作との間に若干違和感を覚えつつも、この問いかけが心から消えることはなかった。スピヴァクの結論は本稿中で検討するが、たとえば国際的なボランティア活動において、日本という経済先進国にいる人間が発展途上にある国の人々にどう関わるかというより字義に近い「サバルタン」との関係性の問題だけではなく、被災者、貧困者、高齢者、障がい者、犯罪被害者などのいわゆる「社会的弱者」に対するボランティア活動においても、人といかに関わるか、そしてそもそもその人たちを「表象／代弁」できるのか、という問いは、つねにボランティア活動における問題性として内在する。誰かのために何かをやりたいという気持ちや、その気持ちを実行に移すこと、そしてそのための勇気は尊いものである。しかし自分自身より「弱く」、ハンディキャップを持った、あるいは共通の経験を持たない人たちに関わることはそれほど簡単なことではない。ボランティアはつねに、個人であれ、集団であれ、あるいは、たとえば自然・環境・動物・植物といった人でないものであれ、「他者」に対する／のための活動であり、「他者」との関係性を（少なくとも本来的には）問わざるを得ない文化的実践である。本稿ではこのような視点から、スピヴァクの「サバルタンは語ることができるか？」という問いを出発点とし、彼女の理論と実践を参照しながら、大学生のボランティアについて文化研究の視点から考察する試みを行う。

２.「サバルタンは語ることができるか？」

スピヴァクの論文「サバルタンは語ることができるか？」は、1983年にイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校で開催された「マルクス主義と文化の解釈（Marxism and the Interpretation of Culture）」というセミナーにおけるスピヴァクの講演内容が同名の論集（1988）に収録されたものである[8]。同論文の冒頭には、「主体を問題化する現在の西洋の努力を批評することから、西洋の言説のなかで第三世界の主体がいかに表象されるかという問題へと動くことになるだろう」（Spivak 1988a, p. 271）と書かれている。

サバルタン（subaltern）とは、もともと英国軍の「准大尉・少尉」を指す単語であるが、アントニオ・グラムシはこのことばを、「ヘゲモニーを持たない集団や階級」である南イタリアの田舎の貧農集団を表す語として用い、それを応用したのがインドの非エリート階層について歴史研究を行うサバルタン・スタディーズ・グループであった。ことばの定義は拡張され、被支配的な階層・ジェンダー・職業など、周縁化された従属的な集団に対して用いられるようになった（モートン 2005, 84-85頁）。

同論文でスピヴァクはまず「再現／表象」と「代弁／代表」という英語やフランス語では一語で表される概念（representation/représentation）が、ドイツ語ではDarstellung/Vertretungという同一化できない用語であることをカール・マルクスに依拠しながら示し、ミシェル・フーコーとジル・ドゥルーズがこのことばの意味を混同することで、欲望と権力の（大文字の）主体と、被抑圧者という（小文字の）主体の間を媒介する透明な知識人という存在となっていることを批判する。次に階級横断的なサバルタン概念を用いてインドの被支配階級の研究を行う「サバルタン・スタディーズ・グループ」に対し、スピヴァクは一定の評価を与えつつも、サバルタンの主体を実体的に捉え、「純粋な意識の形態」を想定し、「われわれは人民[9]の政治を追究するとともに、彼らの意識にいかに触れることができるのか？どのような声＝意識をもってサバルタンは語ることができるのか？」（Spivak 1988a, pp. 285-286）というサバルタン・スタディーズ・グループが発する問いそのものに異議を唱える。さらに西洋的知と主体の概念に立脚するフェミニズムが、「第三世界」の抑圧された女性に語らせることに対しても批判の矛先を向ける。

> 搾取されている主体は、女性の搾取というテクストについて知ることも語ることもできないのだ。たと

え代弁することをしない知識人が、彼女のために語る場を設けるという馬鹿げたことが達成されるとしても（Spivak 1988a, p. 288）。

スピヴァクはフェミニズムや性差別反対運動の重要性を支持し、かつ自分自身も関わりながら、それでもこういった運動がサバルタンの女性の意識や主体を想定するところに西洋の男性的知との共謀を見る。それを克服するために、彼女はジャック・デリダを援用する。彼女は、デリダの「グラマトロジー」の企図が、ヨーロッパの「自民族中心主義的な（大文字の）主体が、選択的に（大文字の）他者を定義することで自らを構築することをさせない」「善意の西洋人の知識人にとってのプログラム」（Spivak 1988a, p. 292）であるとして次のように述べる。

私にとってより重要なのは、彼がヨーロッパの哲学者として、ヨーロッパ的（大文字の）主体が（大文字の）他者を自民族中心主義の周縁として構成する傾向があることを明白にし、あらゆるロゴス中心主義的努力をともなった、それゆえあらゆるグラマトロジー的努力をともなった問題としてこのことを位置付けていることなのである。（Spivak 1988a, p. 293）〔訳注：傍点部分は、原著ではイタリックで書かれている。〕

スピヴァクはデリダが帝国主義による植民地的主体の構築という問題には関わってはいないとしながらも、帝国主義についての理論を作り上げるポストコロニアルの知識人にとって、デリダのグラマトロジーの試みが、「他者の構成の力学」（Spivak 1988a, p. 294）を理解するために有益だとする。

最後の章では、歴史的に沈黙させられてきたサバルタン女性の主体について、サティー（寡婦焚死）をめぐる帝国主義的および土着主義的言説を脱構築的な態度で読み直す。そして自殺したブヴァネーシュワリー・バッドリーという女性のエピソード[10]で最後を締め括り、「サバルタンは語ることができない」（Spivak 1988a, p. 308）とスピヴァクは結論付ける[11]。

論文中にはサバルタンのポストコロニアル的主体をめぐるスピヴァクにとってのさまざまな問題性が複雑に織り込まれており、以上のような簡潔なまとめで「サバルタンは語ることができるか？」という論文を正しく紹介できているとは言えない[12]。さらに「サバルタンは語ることができない」というインパクトを与える結語は、サバルタンが語れないのだから知識人はサバルタンの代弁もできない、というような印象を与えかねなかった。スピヴァクの例を挙げれば、「私は白人男性なので、フェミニストとして／黒人のために語れません」といった言い方である（Spivak 1988b, p. 332）。しかし「サバルタンを代弁することはできない」「サバルタンには語らせ得ない」という言い方で、もし他者に対するどんな行為も、少なくとも理論的には無効または自己矛盾を孕むものとされ、何もしないことが正当化されるとすれば、それは彼女の本来意図するところではないだろう。

ボランティアの文脈において考えるとき、もちろん支援される側の人たちがサバルタンである、あるいはサバルタン同様であると言いたいのではない。しかし「サバルタン性」という点では部分的に重ねて見ることが可能であろう。問題は、支援される人たち自身（支援する側からしての「他者」）が自己を表象できない／語れないとき、何をどのようにできるか、ということである。ボランティアをする主体は多くの場合、NGO や NPO のようなボランティア組織や、あるいは個人の活動家という「代弁者」である。その人たちを含めてボランティアをする側は、支援される人たちが本当に求めていることは何か、その人たちはどのようにしてほしいか、あるいはどのようになりたいのかを理解するためには、自らの歴史のなかで形成してきた知、理想、信念等に拠って立たざるを得ない。そうであるなら、自己を表象できない／語れない他者について、どのように向き合うことが可能であろうか？この問いを考察するために、次にスピヴァク自身の実践について見てみたい。

３．語ることができない他者について何ができるか

スピヴァクはインタビューや講演において、つねに自らの立場を明確に示している。とりわけ近年、西ベンガルにおける農村での教育に力を入れており、そういった活動と理論がどのように彼女のなかで往還しているのかを見ることは興味深い。彼女はすでに「サバルタンは語ることができるか？」論文のなかで、ポストコロニアルの女性の知識人がするべきこととして「知識を捨て去る／学んだことを意識的に忘れる（to unlearn）」という概念を出す。これはサバルタンに関わる際に、知識人が自分の特権のなかで身に付けてきた言説を、意識的・体系的に外す作業である。このことによって、知識人はサバルタンに「耳を傾ける（to listen to）」のでも「代わりに話す（to speak for）」のでもなく、「話しかける（to speak to）」ことができるのである（Spivak 1988a, p. 295）。スピヴァクは別のインタビューのなかでも、自分が「大衆」ということばで思い浮かべるのはインド女性の８割が属する小作農労働の女性であり、「もしこういった人が実際に私に耳を傾け、まだ数多くいる植民地の伝道師の一人として私を退けるのではない方法で私が語ることができるなら（……）、それは知識を捨てるというプロジェクト（the project of unlearning）を実現するこ

とになるでしょう」（Adamson 1986, p. 96）と述べている。知識や経験が多ければ多いほど、他者をより理解することができるという考え方に慣れているとすれば、このスピヴァクの概念はあまりにも途轍もないように思われるかもしれない。しかし *The Spivak Reader* の編者らが言うように、unlearning とは、「自らの歴史、偏見、習得したものであるにもかかわらず、いまでは本能的なものだと思われている反応を批判的に遡る」作業であり、たとえ知識人の責任がより大きなものであるとしても、それは「あらゆる人に課せられた任務」として考えられるのである（Landry and Maclean 1996, pp. 4-5）。

「サバルタンは語ることができるか？」論文の発表から約20年後の2006年に出版されたインタビュー集に収められた Resistance That Cannot Be Recognized as Such（邦訳「抵抗として認識され得ない抵抗」）では、彼女は自分が関わったインドの揚水灌漑の川床の掘削の例を出している。現地の人たちは働くことに気が進まない態度を見せ、怠け者と見なされた。しかしその態度に表れていたのは、自分たちの文化である川の胸元にメスを入れることへのエコロジカルな抵抗だったのだ。誰もそれを抵抗だと認識できなかった（Milevska and Spivak 2006, p. 73）。サバルタンは内的な生活を持ち、感情を持った存在であるにもかかわらず、彼女ら／彼らが公的な領域に入れず、抵抗が抵抗として認められないことが問題なのであり、サバルタンの声が公的な領域に届くための回路が開かれなければならないのである。サバルタン性を聞き、理解するだけではなく、自ら介入し、聞いてもらえるような方法で常態にいる権利を獲得する試みの必要性とスピヴァクが言うとき、そこに彼女の教育者の側面が明確に出ていることを読み取ることができる。しかしそれは啓蒙者としてではなく、「強制的ではない欲望の再配置」（Barlow and Spivak 2006, p. 102）をし、「主体の構造に影響を与え」、「無意識のうちにエージェントとしての行動を身に付けさせる」（Barlow and Spivak 2006, p. 124）ようなやり方を用いてである。たんに知識を教えるのではなく、サバルタンが知識を得るために用いる思考の仕組みを理解し、そして最終的には「サバルタンに市民意識を回復しようとすること」（スピヴァク 2014a, 44頁）が、彼女の努力への名前だとする。

もちろん彼女の仕事に葛藤や失敗はつねにつきまとっているようである。上で引用したインタビューでは、自らの社会運動と知的な仕事との間の葛藤を感じており、「自分が間違っているのが分かるのです。これなら袋小路から抜け出せるだろうと新しい方法を学び続けるのですが、また新たな袋小路が姿を現すのです」（Barlow and Spivak 2006, p. 105）と述べている。しかしここで重要だと思われるのは、たとえ自らの理論と実践がある種の齟齬を生み出すことがあっても、その齟齬や失敗を恐れず、つねに unlearn しながら、新たに学び直し、さらに再帰的に理論へと繋いでいく彼女の姿勢である。

スピヴァクのやり方は知識人として、そして教育者として実践できることの例であって、彼女のやり方がすべてであり、それが正しく模範的であると主張する気はない。しかしスピヴァクの意味する「介入」は、知識人が「サバルタンは語ることができない」、「サバルタンに語らせることはできない」ことを認識したうえで、あるいはそう認識していてもなお、サバルタンに関わる方法の可能性があることを示してくれているのではないだろうか。

４．大学生のボランティアを考える

以上、スピヴァクの「サバルタンは語ることができるか？」という問いを通じて、「語れない他者」に対して何が行えるかを見てきた。この考察を踏まえて、大学生のボランティア活動について考えてみたい。

新年度、多くの学生がボランティア登録用紙を提出するためにボランティアステーションを訪れた。登録用紙にはボランティア活動に対する抱負を書き込む欄があるが、「自分の特技を誰かのために役立てたい」、「子どもたちのために何かできたらと考えています」、「これまでずっとボランティア活動をしてきたので、大学に入っても引き続きやっていきたい」といったようなボランティア精神に溢れたコメントを書いてくれている学生もいる。最初に述べたように、このような純粋な善意はそれ自体が尊いものである。とりわけ「大人」になるにつれ、ほんの少しの時間や労力でも他人のために割くことの難しさが分かるとなおさら、学生のこういった気持ちは貴重に思われる。

すでに問題の所在において述べたように、学生のボランティア活動を評価するために、学生がボランティア体験から学んだことの検証は必要不可欠である。そのために本年度ボランティアステーションでは、とくに指導員による事前指導と事後指導を強化し、学生同士の振り返りの時間を設け、何を学んだか、自分はその体験によってどのように成長したと感じるか等について話し合う機会を増やすことを考えている。さらに、たとえばボランティア精神がどのような体験によって、いかに涵養されるかといったテーマで、実証的な調査研究を行っていくことは教職キャリア開発センターの責務の一つであると考えている。

他方で、本稿でこれまで見てきたように、このような形に還元され得ないボランティアの側面もある。ボランティアに関わるということは、そもそも自分が手助けしようとしている他者とは誰なのか、その他者の主体や表象はどのように歴史的あるいは文化的に構成されてきたのか、そういったことについて考える契機を得ることで

もある。たとえば不登校児童生徒支援をする場合、「不登校の子ども」というカテゴリーで捉えられる子どもたちとはそもそも誰なのだろうか、といった問いに学生は突き当たることになるだろう。その場に存在しない者たちは、《不在》という状態を通してしか自らを表象する術を持たない。不在の者たちは沈黙し、語ることはできない。他者からの表象だけが存在し、自らもその表象を受け入れてしまったとき、そこにその声を聞こう、あるいはその声を声とするための回路を開こうとする誰かが近づかなければ、不在の者たちの「いくつもの声」は汲み上げられないままになってしまうかもしれない。とりわけこれまでむしろ学校にいることが当たり前だった人間にとって、このような問いについて深く考えることは、楽しさよりもむしろ困難や悩みを生み出す可能性もある。しかしここで自分が持っている不登校に対するイメージや考え方はそもそもどこから来たのかに思いを至らせ、それらを一旦 unlearn し、学校に行かない子どもたちや彼女ら／彼らの保護者や関係者らと関わることで学び直しをする。これは決して簡単なプロジェクトではない。スピヴァクのことばで言えば、「失敗ばかり」の “big deal” である（Spivak 1996, p. 307）。彼女は京都賞受賞の講演においても「失敗」を口に出しているが、力強くこう付け加える。「でも諦めることはありません」（スピヴァク 2014a, 43頁）。

他のボランティア活動が不登校支援と同じと言うことはできない。したがって上述のようなものと同じ問題性に突き当たるわけではない。しかしそれでも実際に行動し関与し、「語ることができない他者」との関係性のなかに身を置くことによって、とりわけ自らがヘゲモニーを持った主体として（子どもに対する大人として、持たざる者に対する持つ者として等々）関わる場合には、自己と他者の主体位置について思考することを余儀なくされる。ロバート・コールズの『ボランティアという生き方』には、アメリカ合衆国の公民権運動に関わっていた若者の理想主義が崩れる瞬間のエピソードが描かれている。ある黒人学生が有権者登録を説得するために白人に雇われている小作農の黒人労働者のところに行った。そのとき彼は、無教養なこの男が与えられた運命にしたがって精一杯生きるという自分なりの理想に従っていることを理解していなかった。彼との出会いによって学生は、自分がどれほどひとりよがりの断定や先入観を持って、同じ黒人のためという大義名分のもとに、いかに異なる階層の黒人を無意識に差別していたかに気づき苦悩するというものである（コールズ 1996, 274-285頁）。学生は言う。「彼に対して何の権力も持たない。でも、心の中では確かに権力を持っているんだ。（……）ぼくの気に入る見方をする権利をね」（コールズ 1996, 282頁）。この学生が体験したような深い自己批判と反省は、スピヴァクが「ヘゲモニックな言説の保持者は自らの位置を脱ヘゲモニー化し、他者の主体位置をいかに占有しているかを自ら学ぶ」（Spivak 1988b, p. 332）契機として考えることができるだろう。ボランティアがもたらしてくれるかもしれないこのような内省は、本質的に他者へ関わるという実践から生じるものであり、その実践が再び内省へと戻るという循環的な運動を重ねることは、たしかに曖昧で計測不可能なものではあるが、学びの一つのあり方として考えられるのではないだろうか。そしてこれがとくに大学生にとって意味があるのは、彼女ら／彼らがまだ成長の途中段階にいるために、一方では unlearning にしろ、脱ヘゲモニー化にしろ、大人よりも柔軟に行えるという点、もう一方では、高等教育という知の制度に身を置いているため、実践―内省の循環による学びが多様な形で可能である点においてである。大学でのボランティア活動が、多様な経験から学生が成長することを目的にすること、とくに教員養成大学においては学校現場や子どもたちの行動をあらかじめ知っておくことなどに重点を置くことは必要かつ重要である。このような合理的な目的に加えて、学生が行動し、内省し、思考し、想像力を養えるようなボランティア活動を支えることもまた、高等教育機関としての大学の責任としてあるのではないだろうか。最後にスピヴァクが想像力と思考について語っている部分を引用したい。

> 想像するとは、存在しないものを自らに対して現れさせることです。そして実のところ、考えることも広い意味では、同様の営為です。（……）考えることは想像することと連動しています。わずかでも想像力を行使しない思考など、ありえません。想像力を鍛えるとき、この心の中に深く根ざした能力は、より広大に、よりいっそう柔軟になり、そのことで想像力は、直接の利害や、環境や、背景といったものに閉じ込められないものになります。（スピヴァク 2014b, 86頁）

「人文学の遅い速度で訓練された頭脳と心」（スピヴァク 2014a, 38頁）の重要性は、合理的・合目的的な諸言説によってますます隅に追いやられる傾向にある。しかし一方では実践や行動を重視し、もう一方では深い内省を必要するボランティア活動が、まだ成長段階にある大学生にとって与える影響は大きいと思われる。もちろん別の問題も浮かんでくる。ボランティア活動が楽しいというものだけではなく自己反省という困難な作業をともなうものなら、その理由のためにボランティアに関わろうとしない学生／人々についてどのように捉えるべきなのか。彼女ら／彼らをボランティアから遠ざけているものは何か。これらの問いに答えるためには、最初に述べ

たような実証的な調査が有効であろう。ボランティア活動を通じた学生の成長の検証を含め、こういった問題については今後改めて取り組みたいと考えている。

＊外国語文献との統一を図るために、西暦での表記に統一した。
＊スピヴァクのオリジナルテクストが入手できたものに関しては、邦訳を参考に私訳をした。

謝辞

本学でNANAっくすの活動に８年間従事し、本学の不登校児童生徒支援の構築に多大な貢献をされたボランティア活動支援部門元指導員の松本望さん、20年近くも前に開催されたシンポジウムについて、当時の詳細を一緒に思い出してくれ、入手困難な報告書をすぐに送ってくれた名古屋外国語大学現代国際学部の室淳子さん、いつも拙訳に対する貴重な意見と示唆深いインスピレーションを与えてくれる関西外国語大学外国語学部の松原陽子さんに心より感謝いたします。ありがとうございました。

注

1　「NANAっくす」とは、2005年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択された本学のプロジェクト「学生参加による不登校支援ネットワーク構築（Network Association for Non-Attendance Children Support）」の名称であり、各市町教育委員会・民間の施設・教育関連のNPO・フリースクール・親の会など多様な組織・団体と大学（教員・指導員・学生）が連携して不登校児童支援のためのネットワークの構築を目指すものであった。その一環として、大学と関係諸団体との情報および意見交換や交流のための会議（「ネットワーク会議」）、学内に不登校の子どもたちを招くイベント（「子どもフェスタ」）、市民に向けた不登校支援や進路等に関するセミナーの開催、情報誌の発行や活動報告会、参加学生への活動認定等を行ってきた。教職キャリア開発センターのボランティア活動支援部門が設置されるにあたり、「NANAっくす」の名称はなくなったが、ネットワーク会議や子どもフェスタ等の活動は継続している。

2　2013年１月21日の中央教育審議会「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」には、「大学の学修における取組」として、「学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進める」ために、「インターンシップやサービス・ラーニング、社会体験活動や留学体験等といった教室外学修プログラムを提供することが必要」であり、「それにより、学修への動機付けを強め、成熟社会における社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果を持つことができる」とされている（15-16頁）。なお「教員養成での取組」についても以下のように言及されている。「子どもたちが体験活動を行う際に、学生自ら企画を行ったり、引率したりするボランティア等として参加できる機会を取り入れることで、子どもの成長を実感したり、予期せぬ子どもの行動も予見し対応したりするといった教員に必要な能力を身につけることができる」（16頁）。

3　2012年８月24日の中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、「サービス・ラーニング（service learning）」とは、「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」と定義されている（「用語集」38頁）。

4　本稿ではとくにカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル・スタディーズといった領域を指して文化研究ということばを用いている。

5　ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァクは1942年インド・カルカッタ（現コルカタ）生まれで、カルカッタ大学を卒業後、1959年にアメリカ合衆国に渡り、コーネル大学で英文学の修士号を取得。その後アイオワ大学等を経て、現在はコロンビア大学教授。

6　正確には1996年７月５日に分科会、６日にシンポジウムが、大阪大学コンベンションセンターにて開催された。

7　国際シンポジウム言語文化学の可能性組織委員会編（1996）にシンポジウムの内容が収録されている。このスピヴァクの発言については85頁を参照。

8　1985年にはCan the Subaltern Speak? Speculations on Widow-Sacrifice と題された論文が *Wedge* 誌に掲載されており、この論文に織り込まれている（『サバルタンは語ることができるか』の上村忠男による「訳者あとがき」133頁参照）。後にこの論文は大幅に書き直され、1999年に出版された *A Critique of Postcolonial Reason*（邦訳『ポストコロニアル理性批判』、2003年）の第３章「歴史」に組み入れられている。この改変部分の詳細については上村（1999）参照。

9　ここでは「サバルタン」と同義で使われている。

10　17～８歳で自殺した女性。インド独立闘争に関わっていた。未婚での妊娠ではないことを示すために生理中に自殺したということを、スピヴァクはサティーとの関連で読解している。

11　スピヴァクは改訂した論文（注８参照）において、この結論部を「あれは得策ではなかった」とし、あのように結論付けたのは、「彼女の試みは、彼女自身の

家族のなかにあって、それも女性たちのあいだで、五十年も経たないうちに、失敗に終わってしまっていた。私が「サバルタンは語ることができないのだ」と宣言したのは、直接的には、このことに絶望したからであった」と記している（スピヴァク 2003, 448-449頁）。また「サバルタン・トーク」というインタビューでは、「サバルタンは実際に語っていることを、私は認識できていないというのが一般的な反応であったと思います。なかには私が、抵抗者が語ることを許していないのだと示唆するものもありました」（Spivak 2006, p. 273）と答えている。

12　20年後のインタビューでは、「あの講演の中心概念は、私たちに抵抗だと認識させる社会基盤がなければ、抵抗を行ったとしても、その抵抗は無駄に終わるということだった」（Milevska and Spivak 2006, p. 62）と述べている。もっともこれは極端に切り詰めた表現であって、Subaltern Talk. Interview with the Editors（邦訳「サバルタン・トーク」）では、執筆当時のスピヴァクの状況を含め、「サバルタンは語ることができるか？」の主旨について詳しく述べられている。

引用および参考文献

Adamson, Walter（1986）Interview with Gayatri Chakravorty Spivak. In: *Thesis Eleven*, No. 15, pp. 91-97.（邦訳「文化的自己表現／代表の問題」、『ポスト植民地主義の思想』、93-106頁。）

Barlow, Tani E. and Spivak, Gayatri Chakravorty（2006）Not Really a Properly Intellectual Response. In: Chakravorty, Swapan; Spivak, Gayatri Chakravorty; Milevska, Suzana; Barlow, Tani E.（2006）, pp. 87-135.（邦訳「知識人としてきちんと答えたとは言いがたい回答」、『スピヴァク、みずからを語る　家・サバルタン・知識人』97-153頁。）

Chakravorty, Swapan; Spivak, Gayatri Chakravorty; Milevska, Suzana; Barlow, Tani E.（2006）*Conversations with Gayatri Chakravorty Spivak*. London, New York, Calcutta: Seagull.（邦訳（2008）『スピヴァク、みずからを語る　家・サバルタン・知識人』（大池真知子訳）、岩波書店。）

中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（2012年８月24日）。

中央教育審議会（2013）「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」（2013年１月21日）。

コールズ、ロバート（1996）『ボランティアという生き方』（池田比佐子訳）、朝日新聞社。

デリダ、ジャック（1972）『根源の彼方に　グラマトロジーについて　上・下』（足立和浩訳）、現代思潮社。

Gunew, Sneja and Spivak, Gayatri Chakravorty（1986）Question of Multi-Culturalism. In: *HECATE*, pp. 136-142.（邦訳「マルチ文化主義の諸問題」、『ポスト植民地主義の思想』、107-120頁。）

星野俊也編（2014）『いくつもの声　ガヤトリ・C・スピヴァク日本講演集』（本橋哲也・篠原雅武訳）、人文書院。

国際シンポジウム言語文化学の可能性組織委員会編（1996）『言語文化学の可能性――現在と未来――国際シンポジウム報告書』。

Landry, Donna and Maclean, Gerald（1996）*The Spivak Reader. Selected Works of Gayatri Chakravorty Spivak*. New York: Routledge.

Milevska, Suzana and Spivak, Gayatri Chakravorty（2006）Resistance That Cannot Be Recognized as Such. In: Chakravorty, Swapan; Spivak, Gayatri Chakravorty; Milevska, Suzana; Barlow, Tani E.（2006）, pp. 57-85.（邦訳（2008）「抵抗として認識され得ない抵抗」、『スピヴァク、みずからを語る　家・サバルタン・知識人』、65-95頁。）

モートン、スティーブン（2005）『ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク』（本橋哲也訳）、青土社。

酒井佑輔（2013）「問い直し続けるためのアンラーン（unlearn）――『ハンセン病患者は語ることができるのか』」、『月刊社会教育』（2013年２月号）、60-65頁。

Spivak, Gayatri Chakravorty（1976）Translator's Preface. In: Derrida, Jacques（1976）*Of Grammatology*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, pp. ix-xc.（邦訳（2005）『デリダ論　『グラマトロジーについて』英訳版序文』（田尻芳樹訳）、平凡社。）

Spivak, Gayatri Chakravorty（1988a）Can the Subaltern Speak? In: Nelson, Cary; Grossberg, Lawrence（eds.）（1988）*Marxism and the Interpretation of Culture*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, pp. 271-313.（邦訳（1998）『サバルタンは語ることができるか』（上村忠男訳）、みすず書房。）

Spivak, Gayatri Chakravorty（1988b）The Intervention Interview. With Terry Threadgold and Frances Bartkowski. In: *Southern Humanities Review*（Fall 1988）, 22(4), pp. 323-343.（邦訳「『政治介入（インターベンション）』のためのインタビュー」、『ポスト植民地主義の思想』、203-236頁。）

スピヴァク、ガヤトリ・C（1990）『文化としての他者』（鈴木聡・大野雅子他訳）、紀伊國屋書店。

Spivak, Gayatri Chakravorty（1996）Subaltern Talk. Interview with the Editors. In: Landry, Donna and Maclean, Gerald（1996）, pp. 287-308.（邦訳「サバル

タン・トーク」（吉原ゆかり訳）、『現代思想』（1999年７月号）、80-100頁。）
スピヴァク、ガヤトリ・C（2003）『ポストコロニアル理性批判』（上村忠男・本橋哲也他訳）、月曜社。
スピヴァク、ガヤトリ・C（2005）『ポスト植民地主義の思想』（清水和子・崎谷若菜訳）、彩流社。
スピヴァク、ガヤトリ・C（2014a）「いくつもの声」、星野編（2014）、13-48頁。
スピヴァク、ガヤトリ・C（2014b）「グローバル化の限界を超える想像力」、星野編（2014）、69-112頁。
上村忠男（1999）「得策ではなかった結語？『サバルタンは語ることができるか』改訂版への熱いうちの覚書」、『現代思想』（1999年７月号）、191-193頁。
上村忠男・太田好信・本橋哲也（1999）「討議　スピヴァクあるいは発話の場のポリティクス」、『現代思想』（1999年７月号）、42-67頁。